
Hearts 月光物語

ししだ じょうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H e a r t s 月光物語

【Nコード】

N 8 6 5 0 U

【作者名】

ししだ じょうた

【あらすじ】

異世界のお話。

老婆が語るのは、誰もが知る昔話だがどこが違う。

人々を苦しめる魔王と後に聖女と呼ばれる少女、そして一人の剣士の物語

無期限更新凍結中です

プロローグ

聖天歴691年 リンゼル王国のはずれにある村

リンゼル王国のはずれにある村には名前がなかった。王国のはずれにあるだけに人は少なく、15組ほどの家族が暮らしているだけの村だからだ。人が少ないだけにつながりは太く、村全体が一個の家族のようでもある。

村の中心、広場になっているそこには辺鄙などところには珍しく教会があり、教会の前にあるベンチには一人の老婆が腰かけていた。

「おばあちゃん！」

「おばあちゃん、お話して！」

いつも老婆の周りには村の子供たちが寄り添っている。老婆はいつからこの村に住んでいるのかもわからないほど昔からこの村に住んでおり、村の住人は誰もが彼女の話を聞いて育ってきた。

老婆はさすがは年の功と言うべきか、実に様々な昔話を知っている。

「ドメニオンの勇者のお話が聞きたい！」

「私、リンドのお姫様のお話がいい！」

「僕は、トルウメニの竜の話がいい」

口々に自分の聞きたい話を言う子供たちに老婆は困ったように微笑んだ。

「あらあらまあまあ、おばあちゃんのお口は一つしかないからそんなにたくさんはしゃべれないのよ」

老婆の言葉に子供たちは不満の声を上げるが、老婆は子供たち一人一人の頭をやさしく撫でてやるとベンチに座りなおした。

「そうだねえ、今日はリンゼルの聖女のお話にしようかね」
「ええ〜！」

子どもたちは先ほどの声を上回る大きさの不満を漏らした。

『リンゼルの聖女』はあまりにも有名な話だ。わざわざ老婆に話してもらわなくとも、誰でも知っているような話である。

「リンゼルの聖女って、聖女様が魔王をやっつけるお話でしょ？」
「ふふふ、おばあちゃんのお話はみんなが知っているおはなしとはちょっと違うんだよ」

老婆は目を細めると一度空を見上げ、教会に視線を移した。
聖女モニカを祀った教会だ。
そして視線を子供たちに戻すとゆっくりと口を開いた。

「むかしむかしのお話さ」

聖女モニカ（前書き）

作中の聖女モニカの話がどんなものかという回です。

作中で、童話という扱いでのものですので、絵本風になっています。ほぼひらがなのため、大変読みにくいかと思いますが、作風のためとご納得ください。

聖女モニカ

むかしむかしのおはなし

にんげんをたべてしまうあくまがいました

あくまたちはたくさんのおうちをたべて、たくさんのおうちをこわしました

あくまはとってもつよくてわるいやつらでした

あくまをやっつけるためににんげんのおうさまたちはみんなでいっしょにたたかおうと言いました

ゆうかなおうさまはたくさんのおうちをつれてあくまたちとたたかいます

かしこいおうさまはたくさんのおうちをつけるためのさくせんをかんがえます

きょうなおうさまはたくさんのおうちをつくってみんなにくばりました

それでもあくまたちはたくさんいてなかなかたたかいはおわりません

あるときひとりのしょうじょが言いました

「おうさま、あくまたちのおうさまである『まおう』をやっつければあくまたちはみんなにげていくでしょう」

おうさまたちはまおうをやっつけるためにしょうじよにたびをするようにいました

「おまえがたびにでるのなら、わたしはともつよいけんしをいっしょにたびをさせよう」

ゆうかなおうさまは言いました。かしこいおうさまも言いました

「おまえがたびにでるのなら、わたしはともかしこいまほうつかいをいっしょにたびさせよう」

そしてきょうなおうさまもいました

「おまえがたびにでるのなら、わたしはともつよいぶきをよういしょう」

しょうじよはおうさまたちのいうとおり、たびにでることにしました

なんにちもなんにちもあるいてひとりのせんしがあくまと
たたかっていました

「たすけよう」

しょうじょとけんしとまほうつかいはせんしをたすけるためにあ
くまをやっつけました

「おお、ありがとう。わたしはまおうをやっつけるためにたびをし
ているのです」

しょうじょたちはせんしをなかにいれてたびをすることになり
ました

しかし、これはまちがだったのです

たびをつづけているとしょうじょたちはたくさんのおくまにかこ
まれてしまいました

「ここはわたしがくいとめる。さあ、さきにいきなさい」

まほうつかいはしょうじょたちをたすけるためにあくまとたと
たかい、しんでしまいました

しょうじょたちはまほうつかいのおかげでたすかりましたが、まほうつかいはもういません

「まほうつかいさん、きつとわたしたちはまおうをやっつけます」

しょうじょはそういうとたびをつづけるためにあるきだしました
そしてとうとうしょうじょたちはまおうのいるおしろにたどりついたのです

「よし、まおうをやっつけるぞ」

しょうじょたちはいっしょにまおうのいるところにいきました

「ふはははは、よくきたな。わたしがまおうだ」

まおうはととてもつよいあくまでした

たたかっていると、けんしがたおれてしまいました

「やあ！」

けんしはしょうじょたちをたすけるためにさいごのちからをふりしぼってまおうにけんをさしました

「ぐわああああ！」

まおうはとてもいたくてやられてしまいそうになりました

「くそう、おまえたちはとてもつよいな。だけど、わたしはとってもあたまがいいのだ！」

まおうがそう言うのせんしがしょうじょにこうげきしました

「どうしたのせんしさん？」

とつぜんせんしがこうげきしてきたので、しょうじょはおどろきました

「ふはははは、じつはおれはまおうさまのてしたなのだ！」

ああ、なんということでしょう

みんなでたすけてあげたせんしはまおうのてしたのあくまだった

のです

「しょうじょはおれがやつつけてやる！」

しょうじょはせんしのせいでやられてしまいました

「ふはははは、これでわたしのかちだ！」

まおうはたおれてしまったしょうじょたちをみおろしてわらいま
した

「そこまです！」

しょうじょのからだをひかりがつつみ、しょうじょはたちあがり
ました

「なぜだ！おまえはやつつけたはずだぞ」

まおうはおどろきました

「わたしはかみさまにえらばれたのです」

しょうじょがぴかっ！とひかるとまおうはずーんとたおれました

「かみさまはわるいやつをゆるさないのです」

まおうがやつつけられたのであくまたちはみんなにげだしました

「まおうさまがやられたぞ！」

「たいへんだ！」

「にげろにげろ！」

まおうはやつつけられましたが、たびをしていたなかまたちはみんなたおれてしまいました

しょうじょはおうさまたちのまえにたつといいました

「わたしはかみさまにえらばれたせいじよです。これからみんななかよくしてわるいことをしてはいけませんよ」

そういうとしょうじょのせなかにまっしろなはねがはえて、しょうじょはそらへとんでいってしまいました

こうしてしょうじょはせいじょもにかとしてたくさんのかをす
くいかみさまのところへいったのでした

めでたしめでたし

—————童話『聖女モニカ』より抜粋

1話

魔天歴291年 シュウフェリテ王国 王都レジェナ

シュウフェリテ王国の首都であるレジェナには多くの勇者や冒険者が集まっていた。首都であるだけに普段から人の出入りは多くあるのだが、今日はいつにもまして勇者、冒険者の数が多い。

彼らが集まる理由は実に簡単なものだ。シュウフェリテ王国が勇者や冒険者の聖戦参加者を募集したためで、それに参加の意思を示したものが集まってきている

王城前の広場には見渡す限りに冒険者や勇者が集まっていた

「壮観、実に壮観だな」

集まってきている勇者や冒険者たちを見回しながら金髪の男はしきりにうなづいていた。筋骨隆々とした強面の冒険者たちの中に混ざっているため、見た目だけでは線が細く弱々しい印象を受けるが、その目はすべてを見通すかのように鋭くそして強い意志を感じさせた。また、よくよく見れば、絞り込まれながらも機能的な筋肉の付き方をしている。

「ああ！ やつとみつけましたよ、ブラッド様」

「ミシエルか、遅かったな」

人込みをかき分けて金髪の男、ブラッドに駆け寄ってきたのは糸目の男だ。身の丈の倍近い大きさの荷物を背負っているが、彼もま

た力があるようには見えない。ブラッドは周囲の冒険者たちとは違った強さを感じさせるのに対し、彼は本当に弱そうに見える。

「遅かったじゃないですよ。待っててくださいって言ったのに、先に行っちゃうだなんて」

「ちんたらしているお前が悪い」

「宿の代金を払ってたんだから仕方ないじゃないですか」

「だとしても、なぜ俺が奴隷であるお前を待たなくてはならん」

「奴隷だからこそ、置いて行ったら逃げたりする可能性とかがあるんですよ」

「なんだ、お前は俺から逃げるつもりなのか？ だとしたら、俺はお前を殺さなきゃならんな」

そう言ってブラッドは腰に掛けられた剣に手をかけた

「縛りあげたうえで、泣いて殺してくださいと言うまで痛めつけ続けてやろう。殺してくださいと言っても、簡単には殺してやらんがな。はっはっはっは」

「はあ、僕が逃げるわけじゃないですか。逃げるならとつくの昔に逃げだしています。僕以外の奴隷を持った時の話をしているんです」

「心配するな、お前以上に便利な奴隷はなかなかいない。よほどのことがなければお前以外には必要ない」

「そう言ってもらえるのは、奴隷冥利に尽きるってやつですけど……」

はあ、とため息をつきながら糸目の男、ミシエルはあたりを見回した

「それにしても、けっこう集まっていますね」

「雑魚が集まっても意味はないだろ」

ブラッドの言葉に周囲の視線が一気に集まった
強面の集団が殺気を隠そうともせず二人を取り囲む

「おい、聞き間違いか？俺たちが雑魚だと？」

「ああ、雑魚だな。魔物との戦闘で何にも出来ずに死んでいく雑魚だ」

「ンだとコラァ！」

「俺らは何もできないなら、てめえらみたいな細いやつに何ができるってんだ？コラァ！」

火に油をそそぐブラッドの態度にミシエルは不安そうに周囲とブラッドを交互に見やる

奴隷として長い間ブラッドの旅に付き従ってきたミシエルにとってこんな事態は当然のことながら初めてではない。しかしながら、こういう事態にあって安心できるはずもない

「ま、まあまあ落ち着いてくださいよ」

「うるせえ、奴隷ごときが邪魔すんな！」

周囲を落ち着かせようとブラッドの前に立つミシエルを強面の男の一人が殴り飛ばした

さすがに、突然殴られるとは思っていなかったミシエルは、避けることもできず、拳をもろに顔で受けた。筋骨隆々とした荒々しい冒険者だけに力は有り余っているようで、殴られたミシエルはもんどりうって地面に倒れた

続いてブラッドにも殴りかかろうとした男は足を踏み出そうとしたが、体は全く前に進まなかった。ずるりと音を立てて男の上半身が地面に落ちる

ミシエルを殴ってから一秒も経つことなく、男は自分がどうなったのか理解できずに事切れた

「俺の奴隷に手をあげるってのはどういう見だ？」

地面に転がった男の上半身を蹴り飛ばしながらブラッドは言った。周囲の強面の集団は何が起きたのかまったく理解できず自分たちの仲間が殺されたというのに何も言わず、ただ茫然としていた。それも当然だろう。注意を払っていなかったとは言え、男たちにはブラッドの剣の軌道を線ですら捉えることができなかったのだ。何が起きたのか理解できずに、男たちは目を点にしたまま地面に落ちた仲間の体を見た

「て、てめえ！」

数秒間もの間呆けていた男たちだが、ようやく事態を理解した男の一人がブラッドに襲いかかった

あまりに焦っていたため、武器に手をかけることなく単純に殴りかかっただけだ

ブラッドの顔めがけて腕を振るう。しかし、男の拳はいつまでたってもブラッドの顔を捉えることはなかった

ごろりと音を立てて転がったのは突き出されたはずの男の腕だった。男は目を点にしながらかき出した自分の腕を見る。つい先ほどまでは子供の胴体ほどの太さの腕があったはずの場所は、肘から先のもなくなっていた。男が自分の腕が切られたと意識した瞬間に男の腕から血が噴き出す

「う、うぎやああ」

男は切られた腕を押さえながら悲鳴を上げた

大の男が無様な悲鳴を上げながら地面を転がりまわる

「で、お前たちが雑魚だってことは納得いただけたかな？」

不敵な笑みを浮かべながら抜き身の剣を肩にかけたブラッドは男たちを見回した

殴りかかった男に加勢しようとしていた男たちは一様にブラッドを恐れ、目を伏せながら悲鳴を上げる男を抱えて逃げ出した

「まったく、自分たちの実力もわからんような連中には困ったもんだな」

ブラッドは剣を一振りして血を飛ばすと剣を鞘におさめた

「こら、さっさと起きろ馬鹿者が！」

そう言ってミシエルに蹴りを入れるとブラッドは自分が切り伏せた男の死体には目もくれずに歩き出す

ミシエルがあわてて体を起こすと、いつのまにか城門が開かれ、周囲にいた多くの人間がいなくなっていた

「ちょ、ブラッド様待ってくださいよ！」

ズンズンと先に行くブラッドの背中を慌てて追いかける

旅はまだ始まらない

1話（後書き）

今日は、ここまでです。

自分の趣味で、若干適当に書くので、見苦しい部分も多々あるかと思いますが、読んでいただけたら嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8650u/>

Hearts 月光物語

2011年11月16日03時00分発行